日本型教育の発展に向けた日本人学校と現地校との協力体制のモデル化に向けて
ーエジプトにおける特別活（TOKKATSU）の展開を手掛かりにー

〇天野　幸輔（名古屋学院大学），鈴木　純一郎（東京･貝取小学校）

本実践研究の背景と位置づけ

事業名：「非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証に関する研究～日本型教育先進地エジプトにおけるTokkatsuの効果検証～」

- ４つのプロジェクトの一つ（Dチーム）の位置づけ
- プロジェクトA：Tokkatsuディプロマの共同開発，プロジェクトB：小学校における非認知能力育成の効果検証，プロジェクトC：特別活動の現地化に関するインタビュー調査
- プロジェクトD：カイロ日本人学校とエジプト日本学校との交流活動
- 2023年12月23日（土）～31日（月）にエジプト（カイロ）にて現地調査を実施

プロジェクトD（通称Dチーム）の目的

①カイロ日本人学校（CJS）とエジプト日本学校（EJS）との間で、小学校教師の交流会を実施する。

→Tokkatsu（学級活動⑵）の公開授業および意見交換会：令和5年9月18日，学級活動⑴の模擬学級会を含む交流活動：令和5年12月28日

②Tokkatsuに対する理解を深めるとともに、合同の学校行事（学芸会や運動会）や保護者交流の可能性について議論する。

→可能性を検討中

③一連のプロセスから、日本型教育の発展に向けた日本人学校と現地校との協力体制をモデル化する。

→①と②の進行状況から検討を進める

目的①：カイロ日本人学校（CJS）とエジプト日本学校（EJS）との間で、小学校教師の交流会を実施する。

TOKKATSU（学級活動⑵）の公開授業および意見交換会：令和5年9月18日

授業参観の様子（公開授業による授業研究は日本で生まれた実践的な研修手法）

写真はEDU-PortニッポンHPより
https://www.eduport.mext.go.jp/journal/project/tsukubauniv_egypt_2023/

目的①：カイロ日本人学校（CJS）とエジプト日本学校（EJS）との間で、小学校教師の交流会を実施する。

学級活動(1)の模擬学級会を含む交流活動：令和5年12月28日

日本の教育課程である特別活動を介しての模擬授業体験と研修

特別活動が、EJS教員とCJS教員の共同授業研究や研修を可能にした

- これまでの「現地校の見学を代表例とする教員の交流活動」は現地理解、現地の教育事情の視察にとどまる。
- より「教師ゆえの、教師にしかできない交流活動」としての提案
- では「日本は教える側、エジプトは教えられる側」という関係性で終始してよいのだろうか？

→①「特別活動は日本の教育課程なのだから、こうあるべき」という姿勢では、文化の侵略になりかねない。どのように取り入れ、どのようなものに創り上げていくか、はあくまでエジプト側が決めていくべきこと　②日本型の負の側面にも留意し、エジプトからの逆輸入としてとらえるなかで、日本が学ぶべきことも見えてくるのではないか

→これらの点をよく理解して、日本人学校と現地校でのよりよい交流活動のモデル化を図る必要がある

モデル化へ向けた本実践研究は、「現地で日本人学校教員がどう活動すべきか」のみを問題とするわけではありません

帰国後の派遣教員の活躍の場は、もっと他に提案できないものでしょうか？

「帰国後の現実」は、派遣者自身も創り上げている側面はないでしょうか？

- 自治体、教育事務所ごとに、実態は異なる
- 帰国後、「遊んできたと言われるのがオチなので、聞かれても積極的には返答していない」「海外へ派遣されたということを、封印して学校で生きている」「他の派遣者に対するうわさ話で、あいつ日本人学校だって！ヤッター！というのを聞いて、何だか怖くなって、何も話していない」「全くやったことのない、日本語教室関連の分掌ばかり務めるようになってしまった」などという声を聞くことがある。
- 積極的な先生方による「派遣国を知る地域の代表として見聞や現地校の視察内容を広める役割」以外の提案はあり得ないでしょうか？
- 派遣国の事情も刻々と変化するので、経験はすぐに古くってしまう。派遣国につながり続ける役割はないだろうか？全海研での活動以外に、派遣国での実践研究から日本全体の教育実践を問うような役割はないだろうか？

帰国教員の現場での新しい関係性
ー「派遣国での実践パートナー」から、「派遣国での成果を生かして日本の教育実践をより高める共同実践者」という新しい帰国教師像の提案 ー

- 派遣国エジプトのカイロ日本人学校で、エジプト日本学校との授業研究会で公開授業を行ったH氏は、令和6年3月帰国後に岐阜県公立小学校教諭（4年生担任・学年主任、研究主任）
- 初のスーパーバイザーとしてエジプトへ派遣（令和2年～令和5年）された鈴木純一郎氏は、令和5年3月帰国後に東京都多摩市立貝取小学校校長
- エジプトで実際にTokkatsuの普及に共同で務められた。
- 帰国後にはDチームメンバーとして、日本人学校と現地校（ここではエジプト日本学校）の授業（日本の教育課程）を通じた交流のモデル化で、再度協力、協働

写真はEDU-PortニッポンHPより
https://www.eduport.mext.go.jp/journal/project/tsukubauniv_egypt_2023/

・これまでは、誰も行ったことのない外国へ数年住んだ経験のある先生、として文化の大使のような位置づけではなかったでしょうか。
・変化が激しい現在では、体験はすぐに古くなります。帰国後に「コンテンポラリーな事件に関するコメントを求められて困った」とい感想を聞きます。
・今や児童生徒の方が、国外旅行・居住体験が豊富です。

- 派遣国で、「現地校の教師とともによりよい授業づくりで協働する」交流モデルの魅力
- 「日本の教師であること」を視察から感じるにとどまらない、教育技術の比較、その背景にある教育理念への気づきは、協働あってこそ？
- 帰国後に「教師としてどのような力をつけていたいか」「活躍の場として、派遣者間のどのような協働がありうるか」の青写真づくりとして、交流モデルは意義を発揮する。

世界的な視野で日本の教育課程の特徴を知ることで、帰国後、もっと活躍する道があるのではないでしょうか？そんな段階に来ているのではないでしょうか？各自治体でできあがっている、帰国後のある種のモデルを脱する新たな活躍の場を、現地で見出す可能性を吟味するのはいかがでしょうか？

ご清聴ありがとうございました。

謝辞：本研究は、令和5年度 文部科学省「日本型教育の海外展開（EDUPORTニッポン）」調査研究「非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証に関する研究」の助成を受けた。

謝辞：本研究は、日本特別活動学会2023年度重点課題プロジェクト「グローバル・スタンダードとしての日本型教育モデルの開発
―TOKKATSUの海外展開の分析―」の助成を受けた。